



Title	都市圏における高速道路建設と沿道環境整備に関する基礎的研究
Author(s)	恩地, 典雄
Citation	大阪大学, 1988, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2447
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	恩	地	典	雄
学位の種類	工	学	博	士
学位記番号	第	8188	号	
学位授与の日付	昭和	63年	3月	25日
学位授与の要件	工学研究科土木工学専攻			
	学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	都市圏における高速道路建設と沿道環境整備に関する基礎的研究			
論文審査委員	(主査) 教授 毛利 正光			
	教授 室田 明	教授 楠木 亨	教授 福本 勢士	
	教授 松井 保			

論文内容の要旨

都市圏における高速道路建設の必要性は年々増加しているにもかかわらず、その沿道環境に対する影響が十分に明らかになっていないこと、建設に至るまでの周辺住民との合意形成過程に不十分な点があることから必ずしも高速道路の建設は円滑に行われていない。本論文は、都市における高速道路建設のあり方と今後の沿道環境整備の方向について論じたものである。

第1章では、本論文の対象とする問題の重要性、目的、従来の研究、本論文の意義並びに構成について述べている。

第2章では、住民意識調査を分析することから高速道路を住民がどのように意識あるいは評価しているかを分析し、道路の便利さ、道路建設の必要性は少なからず住民は意識しているが、一方で道路建設が及ぼす住民生活への影響と不安をぬぐいきれず、道路建設を忌避する住民も多く存在していると考えられることを示している。特に、高速道路についてはその構造や利用形態ゆえに地区への影響をつかみえない傾向が強いことを示している。

第3章では、過去において鉄道が建設された地域を対象に高速道路が市街地形成へ及ぼす影響について事例研究を行ない、高速道路沿道ではほとんどの立地効果があらわれないこと、立地要因別の分析からは鉄道施設整備が高速道路により分析された反対側の地域に立地の効果を及ぼしにくくなることを示している。

第4章では、都市高速道路を経験した住民の事業進行に伴う意識変化について分析し、住民がほとんど行政や事業者の説明等によって意識を変えず、構想時の意識が着工時まで変わらない住民が多いこと、特に、構想時に反対意識を持つ住民については、他の意識への転換が少ないことを示している。特に、

一時期でも“賛成”または、“反対”という意識を持つとその時の考え方というものが、高速道路開通後の評価をも支配してしまうことを示している。さらに、意識変化は情報入手方法、路線から自宅までの距離、車運転、車保有といった属性との関連が強いことを示している。

第5章では、ゲーミングミュレーション手法を用いて事業手続きについて分析を行ない、今後、積極的に建設に至るまでの事業手続きを見直すことでは、住民投票システムといったものを導入して構想段階から住民参加を約束するような合意形成手続きが望ましいことなどを示している。

第6章では、第2～5章までに得られた知見も整理しながら、今後の沿道整備のあり方についてまとめ、特に、高架下周辺は都市施設の整備が十分でなく、環境整備が必要とされていること、住民の距離による住みわけ現象などを明らかにし、今後の沿道整備の方向性を示している。

最後に第7章で研究成果をまとめるとともに、今後の高速道路建設のあり方について述べている。

論文の審査結果の要旨

既成市街地における都市高速道路の必要性は年とともに増大しているが、沿道住民との利害が十分調整されていないため、高速道路の建設については様々な問題が生じており、建設事業の停止による多大の損失を生じている。そこで本論文は、都市高速道路建設のあり方と今後の沿道環境整備について考究したもので、その成果を要約すると次のようである。

- (1) 市民の都市高速道路に対する意識について、高速道路に対するイメージ、距離感、影響に対する意識などの点から調査分析し、住民の住居地区、高速道路利用形態による高速道路に対する評価グループ分けを行って、地元住民意識の方向を明らかにしている。
- (2) 高速道路が市街地形成に及ぼす影響について事例研究を行い、世帯立地、商業・事業別の立地量と地理的条件との関連、また、都市高速道路事業の進行にともなう賛否意識の変化の実態とその要因を明らかにしている。
- (3) 上記(1)(2)の結果と都市高速道路を中心とした都市施設に関する住民意識の結果及び現行の事業手続き、補償方法に関する事業者の対応、行政の行動等からゲーミングミュレーションモデルを構築し、今後の住民との合意形成を図る上での有用な手法を確立している。
- (4) 今後の沿道環境整備のあり方について、高架下周辺整備と住民の住み分けを促進し、住民意識の点から適当で、実用性の高い沿道整備手法を提案している。

以上都市における高速道路建設のあり方と今後の沿道環境整備の方向について考察し、具体的かつ実用性の高い提案を行ったもので、今後の都市工学、交通計画並びに都市政策上益するところが大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。